母のひろば674号　2020年7月15日発行

母のひろば 674

doshinsha / haha no hiroba

わたしの原風景⑭／田島征彦　2
新刊紹介／竹内早希子　3
新型コロナの世界で子どもを守るために／夏緑　4
新刊紹介／松岡達英、窪田泰子　6
まるまるめいた日記④／種村有希子　7
イラスト／石井聖岳

75年目の帰還

富安陽子

伯父が亡くなって、75年が過ぎた。つまり今年は終戦から75年目ということになる。俊助伯父は終戦の年の５月、特攻作戦によってアメリカのエンタープライズという航空母艦につっこんで亡くなったからだ。当時、特攻は軍の極秘作戦だったそうで、家族にも伯父の動向は一切知らされていなかった。作戦後、戦死の知らせは届いたようだが、遺骨箱の中は空だったと聞いている。私は幼い頃、東京の祖母の家の仏壇に飾られた、ぎょろ目の朗らかな青年の写真を見る度「これは、誰だろう？」と思っていた。その人が20代で亡くなった父の兄だと知った時……いや、この家に死んだ家族がいるのだとわかった時、日だまりにさす光がふと翳（かげ）るような、不思議な寂しさが心を満たしたのを覚えている。

その後、特攻隊のことを研究なさっている菅原完（すがはらかん）さんという方がいろいろ調べて下さって、終戦から何十年もたってやっと、私たち家族は、伯父がエンタープライズへの特攻を成功させて亡くなったと知ったのである。

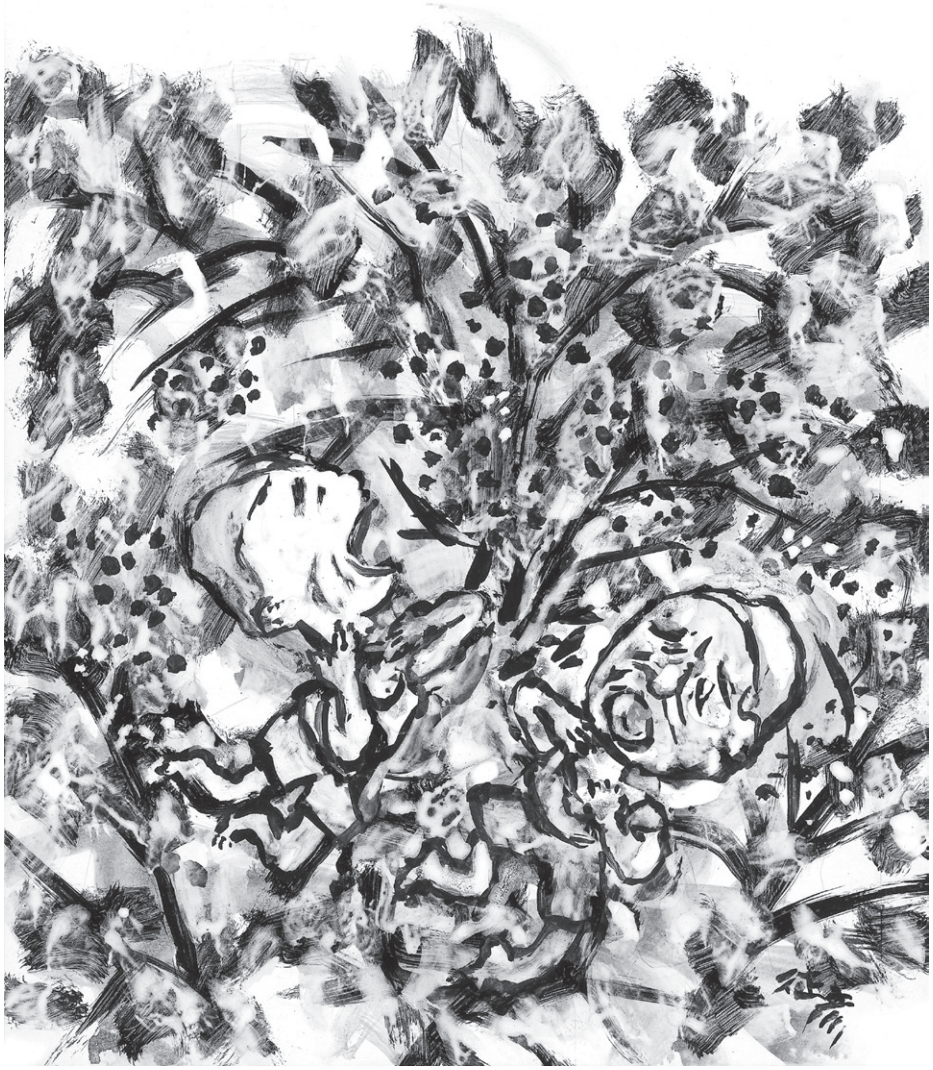
先日、その菅原さんから連絡を頂いた。亡くなった時の伯父のポケットの中身を保管していた方がおられて、もし要望があれば遺族にお返ししたいと言って下さっているとのことだった。その方は、エンタープライズの水兵さんだったのだそうだ。アメリカのお知り合いを通して、菅原さんのもとにその連絡が入ったのは、なんと、伯父の75回目の命日だったらしい。祖父も祖母もとうに亡くなり、昨年は父も亡くなって、伯父を直接知る人はもういない。伯父に会ったこともない私が、遺品の受け取り手にふさわしいのだろうか？　という迷いもあったが、命日の日に連絡が届いたと聞いて、「ああ、そうか」と思った。伯父はきっと、還ってきたかったのだろう。75年の年月を経て尚、ここに戻ってきたいと願っているのだな、という気がした。

しかし、75年とは本当に永い歳月だ。

日々、感染者数や死者数のカウントが続く新型コロナの報道を眺めながら、数え切れない人々の命が奪われた遠い昔の戦争のことを考える。コロナ後の世界が再び、分断と争いの未来へ向かわない事を切に祈りながら……。

さあ、今日は、伯父が好きだったというカレーライスでも作ろうか。腕によりをかけたカレーを、朗らかな遺影に供え、75年ぶりの帰還の報を、伯父といっしょに静かに祝おう。

（とみやす　ようこ／童話作家）



わたしの原風景 14

田島征彦
たじま　ゆきひこ／絵本作家

大阪府の堺で一卵性双生児として生まれた。太平洋戦争の敗戦の年に、父の故郷、高知へ移住した。電気も水道もない山奥だった。ぼくの姓は植田だったが、父が一家六人で、家族のいない偏屈者の爺さんの養子に行くことになり、それで田島に変わったのだった。電気と水道もある、小さな集落へ引っ越して、そこから、ぼくらは一年遅れて小学校へ入学した。

学校へ入っても、ぼくたちフタゴの兄弟はほとんど二人きりで遊んでいた。いつも腹を空かしていたので、食べられるものを探して小川や山の中を歩き回った。

夏休み前の日曜日だったと思う。二人は、山の中をカズラにつかまって、ターザンのように暴れ回って、来たことのない谷間へ下りてきた。ふと見上げると、桑の木に似た灌木が赤い実を、たわわに付けていた。もぎ取って口に入れると、桑の実とは違ったドロリとした甘さだ。両手でむさぼるように食べた。敗戦後の菓子類があまり手に入らぬ時だ。こんな甘いモノを口に入れるのは久しぶりだ。まだまだ枝にたくさん残っている。

そんなに慌てて食べることはないので、ひと息いれた時だった。二人ののどを、同時に激しい痛みが襲った。のどの壁にたくさんの針が刺さったような痛みだ。苦しさでのたうち回った。けもの道しか通っていない、誰も知らない山奥で死んでしまうのだ。恐ろしさのあまり、「助けて、おかあちゃん!!」と二人は、村の方へ向かって泣き叫んだ。しかし、ものの五分も経たない内に、のどの激痛はウソのように消えていた。

お互い言葉を失って、黙ったまま山を下りた。そのことは、二人のあいだでさえ、以後話題にならず、誰にも話すことのない秘密になった。

その木が、和紙の原料になるコウゾだと知ったのは、成人してからだった。

BOOK

『命のうた』～十歳の戦争孤児と、母たちと、わたし

竹内 早希子

命のうた
～ぼくは路上で生きた十歳の戦争孤児～

竹内早希子／著
石井勉／絵
本体価格 1300円＋税

元・戦争孤児の山田清一郎（やまだ せいいちろう）さん（本書の中の“セイちゃん”）に取材を始めたのは、2016年の梅雨どきだった。

初めて「戦争孤児」、そして山田さんのことを知ったのは、2015年７月、朝日新聞の記事だった。戦争孤児の存在と、その過酷な体験に衝撃を受け、涙が止まらなかった。東日本大震災の震災孤児や、長男が当時の戦争孤児（10歳前後が多い）の年齢と近かったことで、シンクロした部分があったのかもしれない。

「後世に語り継ぐべきだ」と直感的に思ったが、自分の手に負えるテーマではないと思った。自分は（両親でさえも）戦後生まれであるし、長男を筆頭とした３児の母という事情もあって、冷静に向き合える自信がなかった。そのまま胸にしまって時が流れた。

１年ほど経ったある明け方、ふと胸騒ぎで目がさめた。「やっぱり書かなくちゃいけない」。日付を見ると６月５日、山田さんが神戸大空襲に遭い、戦争孤児になった日だった。何かが呼んだのか、いや、やはり意識のどこかから消せずにいたのだろう。

すぐ企画書をまとめ、「児童ノンフィクション研究会（作家と編集者が定期的に集まる勉強会）」でメンバーに相談した。そこで「私たちは、戦争体験を直接聞ける最後の世代になる」という事実に気づかされ、突き動かされるように山田さんに連絡を取り、取材に行った。

以来、山田さんとの交流は４年になる。取材は、対面以外に電話とメール。メールのやりとりは180通になった。

神戸や長野県松代町、東京の町……山田さんが歩いた道をたどり、当時の痕跡や資料を探し、あちこちに問い合わせた。「本当の飢え」がわからないので、絶食して山田さんに止められたこともあった。

「なぜ、なにが、あなたをそこまで動かすんですか？」

これまで何度か、山田さんから同じ質問を受けた。その問いに、今もうまく答えられない。ただ、ずっと根底に「なかったことにしてはいけない」、「２度と繰り返してはならない」という母親としての怒りがあったように思う。それは、我が子をひとり残して世を去らねばならなかった山田さんの母、いや、すべての戦争孤児の母たちの怒りでもある。

出版が未確定だった時期、支えになったのは、初稿を読んだ長男の感想だった。「浮浪児のこと、知らなかった。あと戦争が起きたらどうなるか分かる。あと、（読んだ人は）生きなきゃって思うかもね。なんかイヤなこととかあって、死にたいとか思ってる人も、死んじゃダメだって思うかも」

過酷な環境下でも人間らしい心を失わずに生きのびた山田さん（セイちゃん）に、何度でも伝えたい。

あの子たちのことを伝えてくださったこと、今日まで生き抜いてくださったことに、心からの尊敬とありがとうを。

（たけうち　さきこ／ノンフィクション作家）

新型コロナの世界で子どもを守るために

夏 緑

なつ みどり／大阪市生まれ。京都大学大学院理学研究科博士課程修了。日本分子生物学会会員。宇宙作家クラブ会員。漫画原作に『獣医ドリトル』『しっぽの声』（ともに小学館）、科学読み物に『子どものための防災BOOK 72時間生きぬくための101の方法』『火山列島・日本で生きぬくための30章 歴史・噴火・減災』『改訂版 遺伝子・DNAのすべて』（いずれも童心社）『進化論と生物の謎がよ～くわかる本』『これだけ！iPS細胞』（ともに秀和システム）などの著作がある。漫画原作『らせんの迷宮～遺伝子捜査』（小学館）はテレビドラマが近日放送予定。

●最強の手洗い●

日本人の死因のトップは、ガン・心疾患・老衰だ。しかし江戸時代には、天然痘やはしかなどの伝染病が死因のトップで、とくに乳幼児の死亡率が高かった。

現在でも発展途上国であるアフリカ諸国の死因のトップは、ＨＩＶやマラリアといった伝染病の感染症だ。

ところで、そのアフリカで子どもの感染症を大幅にへらした興味深い啓発活動がある。ＷＨＯが南アフリカの貧困街の子どもたちに配った「希望の石鹸」だ。

この石鹸は透明で、中にミニカーや人形などのおもちゃが入っている。子どもたちはおもちゃがほしくて、その石鹸で熱心に手を洗い、体や頭も洗う。

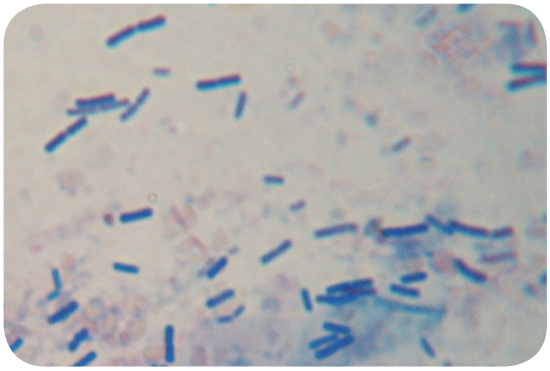
それまで貧困街の子どもたちは、チフスやコレラなどの感染症で多くが死んでいた。しかし手洗いの習慣によって、感染症の発生率が七〇パーセントも減った。

水道水がある場所なら、消毒液よりも石鹸による手洗いのほうが病原体の残骸まですっきりと洗い流せて効果的だ。

わが家の子どもたちの学校では新型コロナ流行後、ハンドソープやボディソープをトラベル用の携帯容器につめて持ち歩くのが流行った。公園でもどこでも手洗いができて便利そうだ。

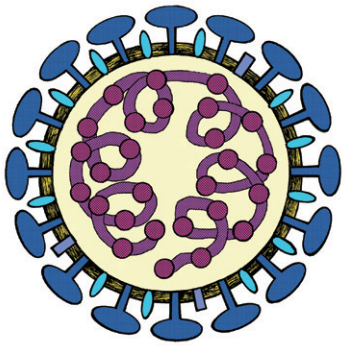
感染防止に手洗いが重要であることをはじめて発見したのは、十九世紀オーストリアの医師センメルヴェイスである。

今でこそ衛生のため手洗いは当然で、医学生や看護学生には手洗いと手指消毒の実習がおこなわれているが、当時の欧州では必要がないと考えられていた。むしろ中世に公衆浴場でコレラやペストが大流行したことから、顔や体を洗うと病気になるという意識が根強かった。



糞便の中には１兆個の細菌がいる。不衛生な環境ではここから伝染病が拡大する。

センメルヴェイスがつとめていた病院では、多くの産婦が産褥熱で死亡していた。彼は産科医の手に付着した何かが病気を引き起こしていると考え、接触感染を予防するため、手を消毒する「手洗い法」を考案した。こうして死亡率をほぼゼロに下げることに成功し、「母親たちの救い主」と呼ばれた。



新型コロナウイルス。恐ろしい病原体だが、核酸とタンパク質と脂質のかたまりなので、石鹸や洗剤や紫外線で破壊できる。

●細菌学の父たち●

しかしセンメルヴェイスと手洗い法は医学会に排除されてしまう。彼は失意のうちに死んでいった。

その数年後にあらわれたのが近代細菌学の始祖、フランスのパスツールとドイツのコッホだ。彼らは感染症の原因が細

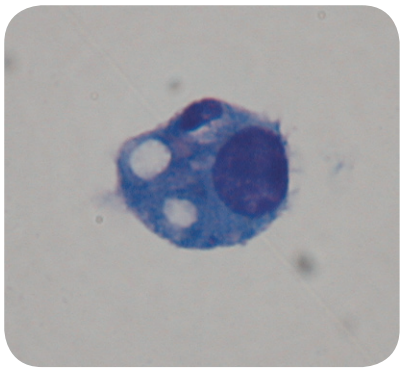
菌であることをつきとめ、ワクチンの予防接種を開発した。おかげでセンメルヴェイスの功績も見直された。

コッホ四高弟のひとりレフラーはウイルスを発見し、同じく北里柴三郎（きたさとしばさぶろう）は破傷風やジフテリアのワクチンの基礎をつくった。これらは読者の皆様がよくご存知の四種混合ワクチンとして、乳幼児の定期予防接種に用いられている。

コッホと北里をまつった神社（北里大学／東京都港区白金）

北里は日本近代医学の父と呼ばれ、伝染病研究所をつくって日本の公衆衛生に力をつくした。二〇二四年に刷新される新紙幣では、千円札に描かれる。

十九世紀の末、彼は長崎で流行していたコレラを調査し、患者の糞便からコレラ菌の感染が広がると警鐘を鳴らした。当時の人々は井戸水を飲み、くみ取り便所で排泄していた。便所の汚水が川や井戸に流れこむと、飲み水が細菌で汚染されてしまうのだ。



病原性細菌の毒素で細胞は穴だらけになり、破壊されてしまう。

そこでコレラの流行を防ぐには、生水を飲まないこと、伝染病を媒介する青バエを退治すること、便所を掃除して公衆衛生を保つことを人々に知らせた。

また北里は香港でペストが流行したとき、患者の家のネズミの血中にペスト菌を見つけ、ネズミの駆除をすすめた。その結果、香港のペストは一気に収束した。

●科学にもとづいた想像力●

それから百年以上がたち、今の日本は当時に比べ清潔になったように見える。しかし実際には、ぽっかりと無防備な弱点があちこちにある。

たとえば三十から五十代の人には、はしかや風疹のワクチンがじゅうぶんに接種されていない。とくにはしかにかかると、それまで積み重ねた免疫がリセットされ、さまざまな病気に再感染してしまうので、予防接種でふせぐ必要がある。

飼い犬の狂犬病ワクチンの接種率もひじょうに低い。一九九三年には九九パーセントの犬が予防接種を受けていたが、年々低下し、現在は未登録の犬を合わせると半分を切る。いつ外国から狂犬病の動物が入りこんで、大流行してもおかしくない数値だ。

公衆衛生の最大の敵は、病原体ではなく、人間の心の油断だと思う。新型コロナが収束するまで、ソーシャルディスタンスが必要な状況は二年ほど続くと見られている。マスクや「NO!!3密」はすっかりマナーとして定着したが、気をゆるめたところに落とし穴があるだろう。

病原体は見えないからこわい。逆に見えないから油断してしまう。だが、科学にもとづいて想像力を働かせれば、何が安全でどこがそうでない可能性があるかが見えてくる。そうして、油断せず、悲観もせず、長丁場になると腰をすえて、子どもたちを守っていきたい。

祝！ 香港版『へいわって どんなこと?』が、HONG KONG BOOK PRIZEを受賞！

浜田桂子・作

『和平是什麼?』
香港版『へいわって どんなこと?』

「HONG KONG BOOK PRIZE」は、その年に刊行された香港の出版物の中から、優れた作品に贈られる賞です。公共放送局「香港電台」が主催し、審査員と読者の投票により選ばれます。

香港版『へいわって どんなこと?』は、昨年翻訳出版されました。絵本に込められた子どもたちへの平和への思いが、国境を越えて広がっています。

BOOK

“ほんとう”の恐竜をもとめて

松岡　達英

ベッドのなかは
きょうりゅうのくに

まつおかたつひで／作・絵
本体価格 1400円＋税

私は小さい頃、ふとんのなかにもぐって想像をふくらませる遊びをよくしていました。暗やみのなかをじっと見つめると黒以外の色が見えてきて、その形を追っているうちに時空を超えて冒険しているのです。暗やみのふしぎです。そんな体験が、ベッドのなかにもぐって恐竜の世界へ行ってしまう、この絵本へと繋がったのだと思います。

ところで、大人になり恐竜絵本を創るにあたって、私は“恐竜がほんとうに生きていた”という実感をもとめてアメリカのユタ州バーナルにある恐竜の町へ行ったことがあります。そこは大昔の地層が地上に現れ、洪水で流された恐竜の化石がむき出しになった学術的価値のある化石発掘現場であり、博物館としても機能しています。

私はこの恐竜の壁を見上げて、思わず「すごーい」と声が出ました。ビルの４階にも届くアパトサウルスやカマラサウルス、背中に板状の骨が並ぶステゴサウルスなどの全骨格が、まるで生きているみたいに埋まっていました。

「ほんとうにいたんだ、ほんとうにこんな巨大な生物がいたんだ!!」タイムスリップした私は、この感動を絵本にして子どもたちに伝えたいと思いました。恐竜のいた時代の地球の歴史は、地続きに現代の私たちへと繋がっているのです。

（まつおか　たつひで／自然・生物画家、絵本作家）

BOOK

果てしない想像の冒険へ

窪田　泰子

雨ふる本屋と
雨かんむりの花

日向理恵子／作
吉田尚令／絵
本体価格 1400円＋税

本を愛する気持ち、想像することの楽しさが溢れるほどに詰まった「雨ふる本屋」シリーズの５冊目。

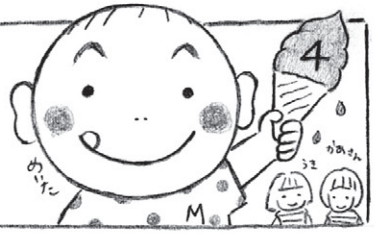
今作のモチーフはサーカスです。こんなサーカスを誰が想像することが出来たことでしょう。どんな風に物語が進んでいくのか最後までハラハラドキドキのし通しです。シリーズを重ねるごとに沢山の個性的な登場人物が登場し、どんどん仲間が増えていきます。それぞれの個性のままにみんな素敵なのです。読者は物語の主人公、ルウ子の葛藤や成長を周りの素敵な人たちと共に見守っているつもりがいつの間にか、物語の中にすっぽりと入り込んでしまうことでしょう。想像することの楽しさを存分に感じることが出来るこの物語を読むことで、自らもお話を書いてみたくなる子どもたちが沢山出てくるのではないかと思うのです。そして、それを想像するだけで私のわくわくは止まりません。

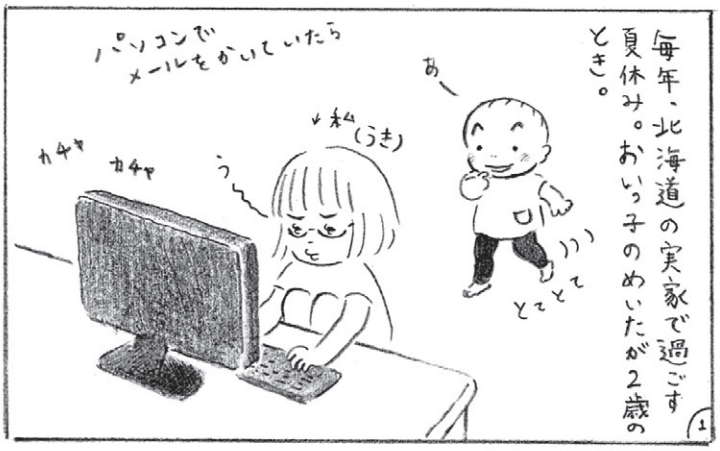
大切なことは、自分の想像や空想を疑わないこと。子どもたちは新しい扉をどんどん開いていくことが出来るし、大人は思い出す術さえも忘れてしまった記憶の奥の扉に気づくことでしょう。そして、またそこに新しいすきまの世界が生まれ、想像する力、夢みる力はどんどん広がるのです。頭の中にも胸の中にも、おなかにも手足の先にも、おさまりきらないほど膨れ上がる物語たち。そこからまた新しい冒険が始まります。

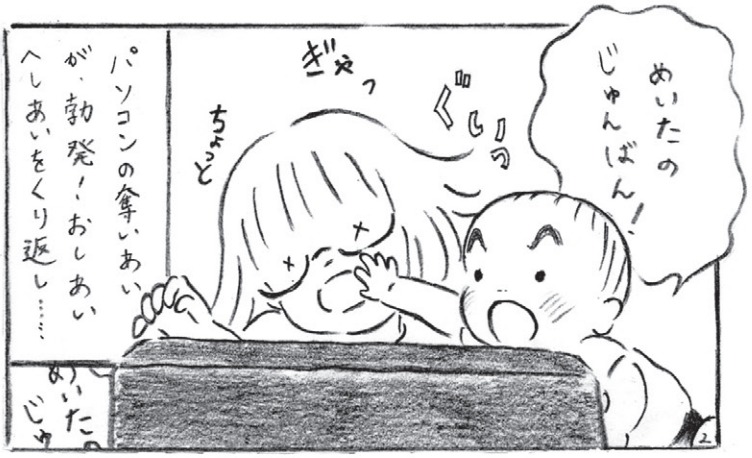
（くぼた　やすこ／「おひさまゆうびん舎」店主）

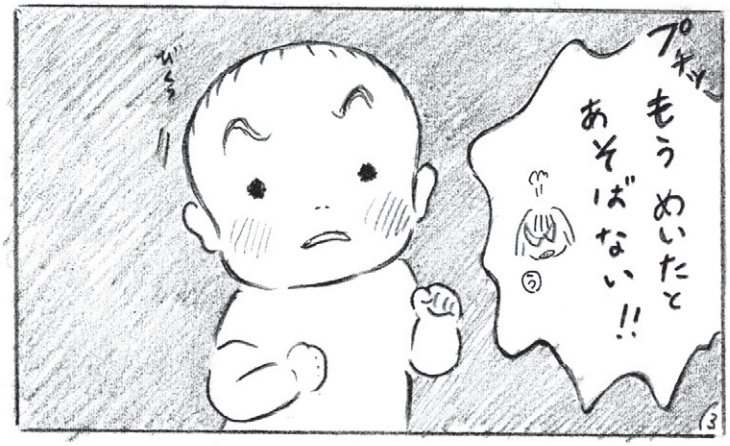
まるまるめいた日記

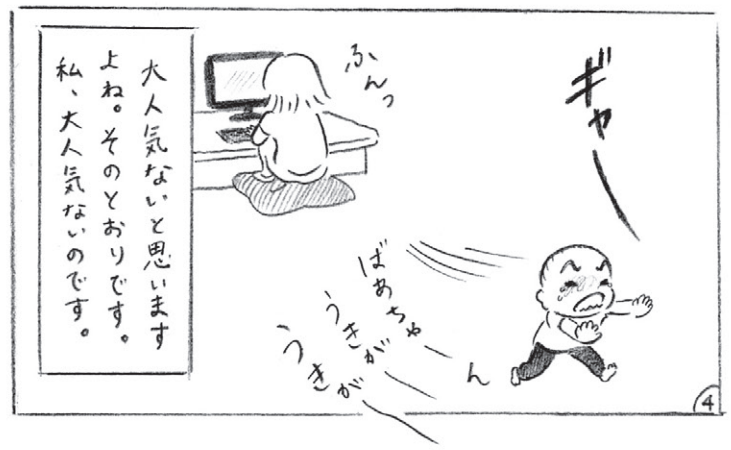
種村 有希子

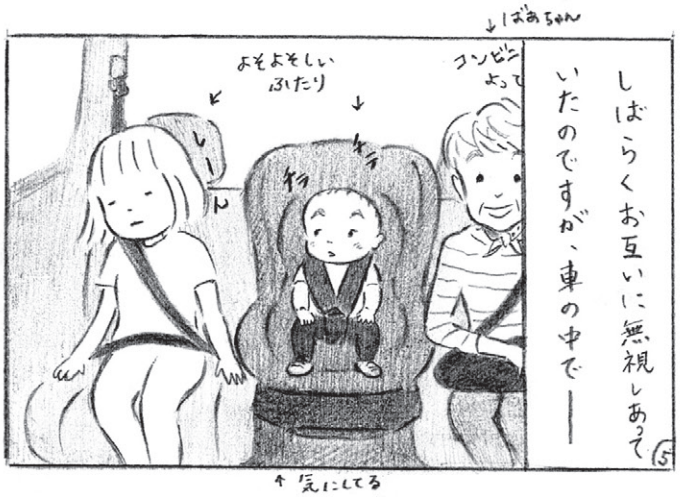


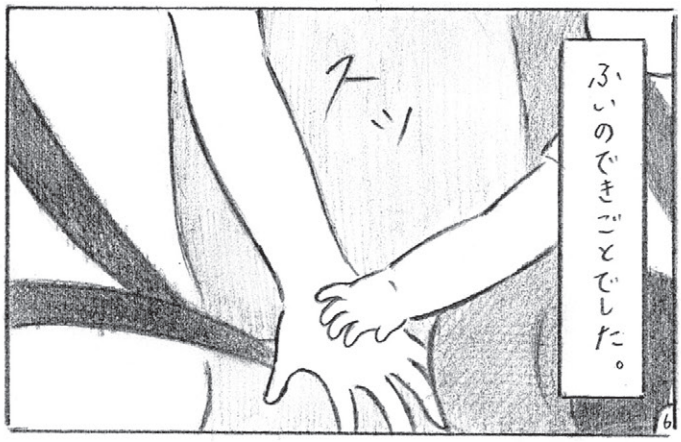


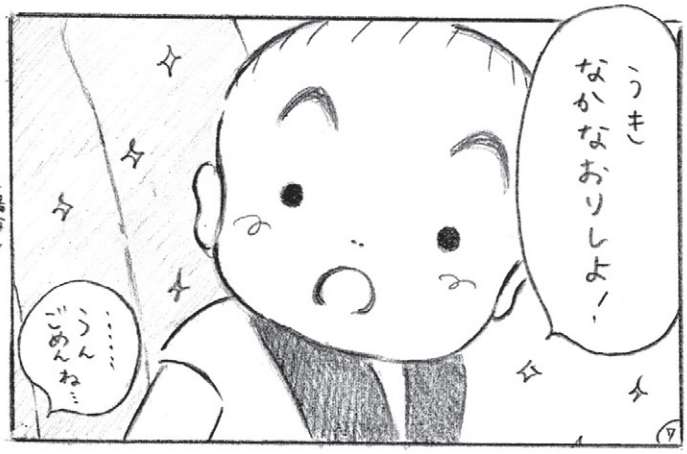


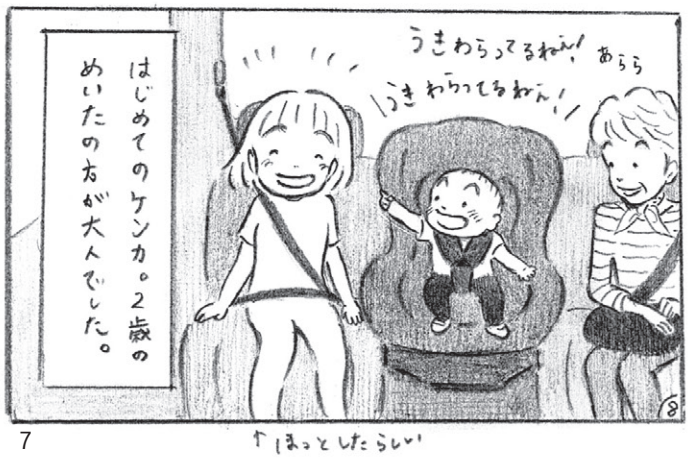












ほっとしたらしい

つづく

７月の新刊図書！

単行本図書

雨ふる本屋と雨かんむりの花

日向理恵子／作
吉田尚令／絵
本体価格 1400円＋税

ルウ子とサラが「雨ふる本屋」へ行くと、舞々子さんのようすがへんです。このままでは、王国の物語がいつ完成するのかわかりません……。

単行本図書

命のうた ～ぼくは路上で生きた十歳の戦争孤児～

竹内早希子／著
石井勉／絵
本体価格 1400円＋税

戦後75年目の今年、日本全国に12万人以上いた戦争孤児たちの声が、あなたには届いただろうか。渾身のノンフィクション。

絵本・こどものひろば

ベッドのなかはきょうりゅうのくに

まつおかたつひで／作・絵
本体価格 1400円＋税

ベッドの中にもぐっていくと、そこは恐竜のせかい。迷子のランベオサウルスのお母さんをさがして、ぼくは旅にでた。

童心社の絵本

みどりのほし

林木林／作
長谷川義史／絵
本体価格 1500円＋税

夏みかんのてっぺんに、みどりのほし、みぃつけた。やさいもほしのかんむりをかぶってる。みどりのほしでうまれたしるし！

童心社のキャラクターグッズ

せなけいこおばけパズル

せなけいこ
本体価格 500円＋税

ロングセラー絵本「せなけいこ　おばけえほん」がパズルになりました。年少・年中向けにわかりやすい30ピースの初級向けパズル。

イラスト／石井聖岳

2020年７月15日発行（毎月刊）
母のひろば 第674号
定価50円（年600円／送料とも）
発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話：03（5976）4181
03（5976）4402（編集）
編集発行人：大熊悟
童心社のホームページ：
https://www.doshinsha.co.jp/
デザイン：谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌（無料）と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただきますと、手続き完了となります。
購読料金は1年分600円（送料とも）。

あとがき

●我が家でも母の方の長兄が特攻隊で戦死しています。しかし、それ以上のことを何も知りません。母が疎開中、非常に嫌な思いをした／父は米軍の爆撃機に追いかけられたことがある……とか断片的なことはあっても、戦争中の話は殆ど聞かずじまいでした。人の記憶はかけがえのないもの、相手にきちんと向き合い耳を傾けることが大切だなと思います。 ◉

●「童心社の仲間よ、暗闇の中で光を輝かせ、進む道を照らし出すような、そんな本を作ってほしい。子どもが大好きになって胸ときめかす、そんな本を。」先月ご逝去された田畑精一さんが、童心社創業60年の折に、小誌に寄せてくださった言葉です。この言葉を胸に、子どもに寄り添う本を作っていきたいです。先生、どうか安らかにお休みください。 Ⓝ